

Invisible à Voir みえないものをみる

2013年8月24日（土）～9月4日（水）
展覧会解説ツアー 8月31日（土）、9月1日（日）11時&14時

火曜～土曜：10時～19時 日曜：10時～15時 休館日：月曜、祝日 入場無料

《概要》

フランス人作家5名とフランス在住の日本人作家2名による現代美術展です。
この展覧会は2つのコンセプトによって構成されています。

ひとつはフランス的手法。フランス人は大げさに表現されたものであるとか、お金のかかったものよりも、ごくちっぽけなもの、ごくわずかなもの、目にも映らないような小さいことに愛情を注いでいます。そこから、アーティストは想像を膨らませて作品をつくります。また、フランス人は言いたいことをストレートに表現しなくても、伝えるそして感じとることが大変上手な人たちです。彼らは直接的な方法ではなく、どこかにクッションを置いた伝え方を好みます。

もうひとつは「今日の日本」について。海外からみた日本のイメージは、日本人にとってはあまり目にする機会が少ないのが現実です。展覧会では、フランスに住みながらも日本という国に影響を受けたフランス人作家や、フランス在住の日本人作家がそれぞれの視点で、日出ずる国に想いをよせた作品を展開します。表現方法は彫刻、インスタレーション、パフォーマンス、映像など多岐にわたり、また作品のコンテンツも映画、文学、歴史などバラエティに富んだ内容となっています。

代表作家はドキュメンタ・カッセルや越後妻有トリエンナーレ等で活躍しているジャン=リュック・ヴィルムート（国立パリ高等美術学校教授、元ヴィラ九条山招聘作家）のほか、ポンピドゥーセンターの展覧会 Dreamlands 等に参加、今年は銀座メゾンエルメスのウィンドウディスプレイをアートに変身させたりと日本でも活躍している、ル・ジャンティ・ギャルソン（元ヴィラ九条山招聘作家）も今回作品を発表します。今回の展覧会を通して、直接触れること・見ることのできないフランスのコンテンポラリーアートからのメッセージを感じ取ってみてください。

《参加作家》

ジャン=リュック・ヴィルムート（国立パリ高等美術学校教授、元ヴィラ九条山招聘作家）

ル・ジャンティ・ギャルソン（元ヴィラ九条山招聘作家）

ジュリアン・シニョレ

クレモンス・ルノー

ジョフォワ・サンシエス

糟谷恭子

西村麻美

《キュレーター》糟谷恭子&西村麻美

1 アウト・オブ・プレイス (パフォーマンス) 2011年 京都大覚寺 ジャン＝リュック・ヴィルムート&西村麻美

東日本大震災の3ヶ月後、京都大覚寺で開催された Out of Place という展覧会で制作されたパフォーマンス。毎日新聞に掲載された被災地の小学生、岩見夏希が書いた詩を英訳し、歌にして池に浮かびながら歌ったパフォーマンス。東日本大震災に対するオマージュ。

2 フランス人が教えてくれた日本の歴史 (イチョウの木、鉢) 2013年 糟谷恭子 (かすやきょうこ)

フランス人がイチョウの木をみると、反射的に思い出すのは原爆で生き延びた広島の木というエピソードです。そして、今ではイチョウの木は世界中に生息しています。戦後70年が経とうとしていますが、世界は、イチョウの木を通して日本に起こった歴史を想い、そして現在の私たちをも見続けているのです。

3 ジュリアン・シニョレ 彫刻家

中国の易経に影響を受け、森羅万象の変化についてや、自分なりに古代中国の哲学と宇宙観を解釈し彫刻に表現する。また、数年前より円空の思想に影響を受け、円空の教えに基づいた彫刻を作り始める。今回の展覧会ではその二つ教えからできあがった代表作を発表。

左より

突出 黒檀 (カキノキ科) 2012年 「動きが生まれる」

恵美 樫 (ブナ科) 2009年 「大切なものは目では見えない。心でしか見えないんだ」 サンテグジュペリ

思春期のダンス:若者 山査子 (サンザシ、バラ科) 2012年 「若者は成長する」

4 菓子見本帳 日本画 2013年 西村麻美 船田玉樹の弟子であり息子である日本画家船田奇岑と共同制作

和菓子には食べるだけではない楽しみがいろいろあります。例えば 季節を感じる、物語を語る、こと、謎をといてゆくこと。感覚では5感を使うといわれています。味覚、視覚、嗅覚、触覚、聴覚。現代版の菓子見本帳を制作しました。21世紀における環境問題を日本画を通して表現しています。

<解説> 右から

空中庭園 ヒートアイランド現象を解消するべくビルの屋上の緑化が世界の都市で進んできている

鼓草 地雷の上に咲く花

塑漂 海に浮かぶプラスチックたち

唐草金風花 最近日本で絶滅した花

黒雨 8月6日、8月9日、3月11日

蛍 昔よりも下水がととった今、蛍がもどってきているらしい

幻島 砂漠続き ツバルは海拔1m程しかないのでもしかしたら近いうち消えてなくなってしまう国のようです
日々広がり続ける砂漠

油海 重油にまみれたペリカン

紅波 赤潮

色灰	いまでも行われている水爆実験
碧音	減ってゆくアマゾンの森そしてインディオたち
氷溶	溶けているといわれている氷山
山路	エベレストの山頂付近にころがるゴミ 主に使用済み酸素ボンベと冷凍保存されっぱなしの死体たち
帰道	福島第一の汚染水貯水プール溢れ出るほどにこれから何十年と
宇宙園	宇宙にすてらる衛星のゴミたち

5 お宅／オタク サウンドインスタレーション 2013年 クレモンズ・ルノー

クレモンズ・ルノーは日本語の「おたく」という二つの意味を持つ言葉に注目する。ひとつめのおたくは「家」という意味。ふたつめは、ファミコンやゲーム、インターネット等に夢中な、家の中にもってあまり人とコミュニケーションをとらない人たちの意味。

この作品では、日本人男性の声とパソコンや音声案内で使われている女性の声でのダイアログがふたつのスピーカーから流れる。この会話は、機械の声を男性がまねることから始まっているが、徐々に男性は女性の声に興味を持ち始め、会話をしようと試みる。このU字型のフォームは、一つ目の「お宅」つまり家のような意味合いも持つ。二つのスピーカーの間に座り、オタクの家の中に入りこんで、その会話を聞くという定義も備えている。

6 Why, Japan why? ドローイング 8 枚組 2013年 ジョフォワ・サンシエス

ジョフォワ・サンシエスのみる日本は二つの観点から成り立っている。一つ目は、規律正しい社会性、上下関係、また伝統は古来より守られ続けていること。5、7、5で作られる俳句は、規則や掟を敬い、受け継ぐ日本人の精神性を表す。二つ目は、現代の日本のカルチャーについて。バラエティ番組、アンダーグラウンドな映画、CM等でみられる、風変わりな奇抜、時には暴力的で、突拍子もないことをしてしまう日本人の様子。それをドローイングで表現。この何ともいえない二つの要素の組み合わせが、サンシエスが解釈する、不思議でどこか変な日本という国。

7 ライズ アンド フォール オブ ブラックライト シティー 映像 2009年 ル・ジャンティ・ギャルソン

ル・ジャンティ・ギャルソンが初めて来日した2009年に、横浜黄金町バザールにて制作。フランスで日本文化の代表としてとても人気のある折り紙を、この映画の登場人物、小道具、舞台装置に用いる。それに蛍光テープを張り、真っ暗な部屋で撮影。ストップモーションでコマ撮りをし、映像に組み立てた。また全体の構想はTRON（トロン／1982年）という近未来がテーマのロボットがでてくる映画からインスピレーションも得ている。と同時に、日本の伝統にまつわる要素もコミカルに取り入れられている。